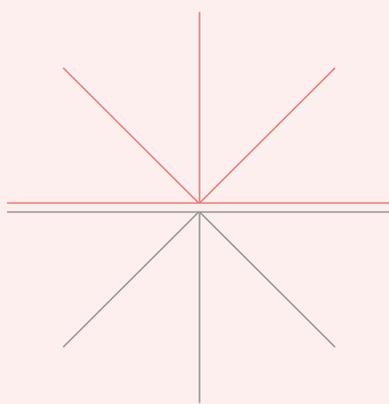


誕生を祝うために



森川
輝一

MORIKAWA
Terukazu

誕生日おめでとう、とわたしたちは言う。家族や友人に、ときにはその日初めて会った人さえ、わりと気楽にこの言葉を差し向ける。しかしわたしたちは、この言葉をいったい何を祝っているのだろうか。そもそも誕生とは、どういうことなのか。

誕生とはまず、①生殖、すなわち、生物としてのヒトがおこなう繁殖行為の帰結としてあらたな個体が産みだされること、である。生殖はヒトにかぎらずどの生き物でもおこなうことで

あるが、ヒトのいのちは、唯一のわたしという個のかたちをとってあらわれる。同じヒトではあるが、わたしはあなたではなく、わたし以外のどんな人とも同じではなく、唯一のこのわたしとして生きるのであり、誕生とはその起点に位置する出来事、つまり、②唯一無二ユニークなの個のはじまりでもある。とはいえ、子どもは無人の荒野に生まれるのではなく、先に生まれていた人々のあいだに生まれ落ち、かれらが構成する社会の一員となる。わたしはわたしであってあ

なたたちとはちがう、とあなたたちに伝えることができるのも、あなたたちと同じ言葉を共にしているからである。このように人間の誕生には、③既存の社会への参入・所属、という要素がふくまれているのであるが、②と③の関係は緊張をはらみ、かならずしも調和的ではない。

子どもはユニークな個として生まれて来るが、親をはじめとする大人たちのほうは、自分たちがよいと思うやり方で育てようとする。たとえば、男の子だからとズボンをはかせ、怪獣

やパトカーのおもちやを買ひ与え、今は腕白でよいけれど、大きくなったらしつかり勉強させて将来は立派な家の跡取りに、と期待を寄せるかもしれないが、当の子どものほうは、心のかではピンクのスカートをはいて人形遊びがしたいと思っていて、やがて時がたち、わたしはほんとうは女性として生きたいのだ、と言いつめるかもしれない。そうしたときに、そうか、ならそうするのがいい、あなたの人生はあなたのものだから、と応答できる人間でありたいとわたしは思うし、それが社会全体としても理にかなった態度であると考えるが、いやそれは間違っている、そんなことを許したら社会は立ちゆかなくなってしまう、と考える人が少なくないことも承知している。誕生のうちにはまれる、上記②と③という二つの要素のあいだの軋轢や衝突のうちに、個人の自由と共同体の秩序をめぐる相克、一般に政治とよばれるいとなみが生起する、と言ってよい。

そうした問題を回避する方法として、②の要素を消し去り、③に①をひきよせる、というやり方がある。精妙な組織を構成して種族の存続をはかるアリやシロアリのばあい、はたらきアリとして生まれた個体ははたらきアリとして生き、奴隷みたくに働いたために生まれたんじゃない、だの、ミュージシャンになってキリギリスと共演したい、だのと自己主張することはない

(ように見える)。みながそのように個を滅却して全体に奉仕すれば、秩序の安寧と種族の繁栄はゆるぎない——という発想は、人間族の歴史においてめずらしいものではないが、その極端な事例として、前世紀前半のドイツにあらわれたナチズムがある。その迫害の対象となったユダヤ人の一人で、いのちからがら逃れたアメリカの地で政治思想家となったH・アーレントは、ナチスの全体主義国家を巨大なアリ塚にたとえてもいる。

全体に奉仕する忠良な国民を殖やすべく、ナチス体制下では多産がおおいに奨励されたが、殖えるべきは純血種の健康な個体でなければならぬとされた。ちょうど家畜の繁殖と同じように、品種をそこなうとみなされた個体は除去の対象となり、やがて劣等とみなされた人々の大規模な殺害へと発展していくが、ヒトラーやヒムラーがしばしば用いたたとえによると、それは害虫の駆除や病原菌の根絶と同じことなのだという。家畜、あるいは害虫や病原菌、いずれにせよ人間は人間未満の生き物に引き下げられてしまうのであるが、同族をガス室につめこむような所業におよぶのはわが人間族を措いてなく、このような言いぐさは、他の生き物たちへの礼を欠くことになるかもしれない。

ナチスの猛威を生きのびたアーレントは、その暴虐を告発するいっぽう、新しい政治のはじ

まりを、個のはじまりとしての人間の誕生にもとめる。その導き手となったのは、古代ローマの哲学者アウグスティヌスの書にあらわれる、「はじまりが存在せんがために人間は創られた」という言葉である。創られた、とあるとおり、アウグスティヌスにとってこの言葉は、神による人間の創造というキリスト教の教えと結びあっている。一人ひとりのいのちは神に与えられたものであり、たんなる生殖の所産ではなく、既存の社会への隷属を宿命づけられてもいない。言いかえれば、だれもが自由な個として

この世に到来し、自分だけの生の時間をきざんでいくのであるが、アウグスティヌスにおいてこの自由は信仰のため、すなわち、欲得まみれの世俗社会に埋没した偽りの生から魂をひきはがし、神の愛へと向け変えるための自由としてある。しかしアーレントがもとめたのは、この世に背をむけて信仰の道にひきこもる自由ではなく、世をともにする隣人たちを苦しめる社会の不正をただし、新しい世界をつくるための自由である。ゆえに彼女は、アウグスティヌスの言葉をいささか大胆に読み替えて、誕生というはじまりは、この世で人間が何かを始める自由のはじまりなのだ、と説く。だれもがユニークな個として、この世界で新しいことを「始めるために生まれて来る」のだ、というのである。国家にいのちを捧げ、敵を皆殺しにせよ、とせ

まる汚れて腐った大人たちに対して、いやだわ
たしはそんなことをするために生まれて来たん
じゃない、とあらがう自由を守り抜くために。
そんなことを許さない新しい世界をわたしたち
はつくってゆくのだ、という希望の灯をともし
続けるために。

自由と平和を言祝ぐ今日の社会は、戦争と虐
殺に狂奔した前世紀の愚行と悲惨から、さしあ
たりとおく離れているように見える。ならばわ
たしたちは、子どもの誕生を、個のはじまりと
いうその尊厳にふさわしいしかたで、祝うこと
ができているだろうか。

二〇一六年秋に政府が策定した「一億総活躍
社会プラン」は、「二〇二五年までに希望出生率
1・8」を達成することをうたう。出生率の向
上を、なぜ国策に掲げる必要があるのか。二〇
二〇年五月策定の「少子化社会対策大綱」によ
れば、少子化の進行が、「労働供給の減少、将来
の経済や市場規模の縮小、経済成長率の低下、
地域・社会の担い手の減少、現役世代の負担の
増加、行政サービスの水準の低下」などの弊害
をもたらすから、である（内閣府HPより）。
国全体の生産力（production）が低下しないよ
うに、労働力の再生産（reproduction）に
つとめねばならない、というわけであるが、な
ぜ生産力の低下に不安を感じるのか、といえ
ば、今の社会のしくみが維持できなくなる恐れ

があるから、である。税収が減り、ますます国
の借金がかさみ、年金や社会保険が立ちゆかな
くなり、わたしたちの老後があらゆるかもし
れないから、である。そんな、疲れて濁った
大人たちの自己保存のために、その民主的代
表である政府が、もっと子を生め、はたらしア
リを殖やせ、と旗振りを始めるにいたったわけ
であり、これのどこが美しい国だというのか、嘆
息するほかない（少子化対策にふくまれる具
体的な施策、たとえば保育所不足の解消といっ
た子育て環境の改善が不要だ、というのでは
ない。それらは、出生数の多寡にかかわらず、
ぐにでも実現をはかるべきことがらである）。
国の都合や政府の思惑はどうあれ、国難を救
うことを意図して子をもうける人は（おそら
く）いないし、子どもたちが生まれて来るの
は、社会の延命や大人の利益のためでは（けっ
して）ない。とはいえ、国の都合や政府の思惑
がかくのごとしである以上、子どもたちの誕生
は、その一つひとつがユニークなはじまりであ
るがゆえに祝福されるのではなく、くずれか
かったアリ塚をささえる労働力の供給としてカ
ウントされてしまうことになる。今やわたした
ちは、誕生日おめでとう、などと気軽に口にす
べきではないのかもしれない。むしろ、出生は
よいことだという前提そのものを、根本から見
直すべきなのかもしれない。

「反出生主義」をとなえて近年注目を集めて
いる哲学者のD・ベネターは、人間の生の価値
を快樂（幸福）と苦痛（不幸）ではかつてみる
と、総じて苦痛のほうが大きく、そもそも苦痛
の存在は快樂の不在より悪いことなのだから
（快樂の存在の非対称性）、人間は生まれて来な
いほうがよいのであり、ゆえに新たに子どもを
産むべきではないのだ、と説く。本稿冒頭の整
理に照らすと、②個のはじまりとは不幸のはじ
まりでしかないのだから、①生殖そのものをや
めるべきだ、と主張していることになる。
たほう、クィア理論家のL・エーデルマン
は、生殖をもたらず性愛のみを正常とみなす異
性愛中心主義（生殖未来主義）を批判して、「反
生殖未来主義」を主張する。子どもが生まれな
ければ社会は減んでしまう、だから子どもを生
まねばならない、という論理がまかりとおるか
ぎり、生殖につながらない（日本のある国会議
員の下劣な言い草を借りれば「生産性のない」
セクシュアリティをもつ者は変態ども（クィ
ア）として永遠に排除され続けるほかないのだ
から、生殖それじたいを否定しなければならな
い。③ゆがんだ社会の延命を阻止するために、
①生殖そのものをやめよ、というわけである。
もう子どもを生むな、社会など滅びてしま
うがよい。二人ともそう言っているわけである
が、その論拠はまったく異なっており、さしあ

たりベネターのほうは切り捨ててよい。生まれることの善し悪しを快楽と苦痛の量ではかる、という人間観が貧困きわまりないうえに、人のいのちの価値なるものを一方的に値踏みするというナチまがいの態度には、うすら寒い思いがするばかりだ（とはいえ、ベネターの主張に、危険な要素はほとんどふくまれていない。出生は害悪なのに出生させられてしまったわたしたちはなんて不幸なんでしょう、こんな不幸が続かないよう、はやく人類が絶滅しますように、とさも楽しそうに触れまわっているにすぎない。いい気なものである）。

個々人の幸福を勝手に付度^{えんた}して出生を悪と決めつけるベネターとはちがひ、エーデルマンの「反生殖未来主義」のほうは、個々人の出生という極私的な出来事を、社会の存続の条件に回収してしまう政治の論理をきびしく撃つ。大人の社会はつねに子どもという未来を必要としており、子どものためと称して自分たちの生存をはかる、という自己保存の論理をすどくえぐり出すのである。国家による生殖の奨励という少子化談義はそのままわかりやすい例だが、出生を自由のはじまりととらえるアーレントの考え方にしても、子どもという未来をたのみにする点では、同じことなのかもしれない。あなたたちは自由だ、世界を新たに变えてゆくことができるんだ、というが、その変えるべき

世界とは、大人たちが勝手につくったしくみやしきたりだらけなうえに、かれらの愚行によってどうしようもなく損なわれた場所ではないか。暴力、差別、格差、破壊、汚染、等々、負の遺産の一切合切を子どもに押しつけ、きみらは自由だ、後始末よろしくね、と丸投げするなんてことがほんとうに許されるのか。こんな場所では何を始めろというのか、責任者出てこい！と若い世代に突き上げられたら、いったいどう答えればいいのか。

とはいっても、エーデルマンが（あるいはベネターが）いかに出生の害悪や生殖の回避を説いたところで、人類みなが生殖をやめるとはどうてい考えられず、したがってこれからも、子どもたちは生まれて来るにちがいない（生殖をうながす「生の欲動」に「死の欲動」を対置し、後者を反生殖未来主義に結びつけるエーデルマンも、おそらく同じように考えている。けれど、死の欲動と生の欲動は相補的な関係にあり、せめぎあいながら共存するものなのだから）。ゆえに、わたしたち大人がなすべきことは、実に明快である。すなわち、世にはびこる暴力、差別、格差、破壊、汚染、等々の横行をおしとどめ、この世界をもう少しマシな場所に変えること、を措いてない。

ただし、子どもをダシにするのはやめよう。未来の子どもたちのために、などはけっして

口にせず、今を生きるわたしたちのために、と言うことにしよう。自分を救えないような者に、まだ生まれてもいない人々のしあわせを遣う資格などあろうはずもなく、まだ見ぬ未来の人々に対して現在を生きる人間が果たすべき責任とは、眼前にひろがる不正と恥辱に立ち向かい、世界を少しでもよき場所に変えること以外にはあり得ないからである。始めるために生まれて来た、という言葉は、わたしたちに差し向けられている。わたしたちこそ、世界のために何かを始める位置にある。いつの日か心から、誕生を祝うために。

（もりかわ てるかず・京都大学大学院法学研究科教授）
著書に、『へ始まり』のアーレント——「出生」の思想の誕生』（岩波書店、二〇一〇）、編著『講義 政治思想と文学』（ナカニシヤ出版、二〇一七）など。